人間関係における絆の役割について
―夫婦間の絆に着目して―

戸　口　愛　泰
現代産業社会と人間関係研究班委嘱研究員
大阪国際大学人間科学部講師

Abstract

This study investigated the concept of Japanese bonds between marriied couples, and how that would affect the level of marital satisfaction as well as the parent-child satisfaction. It is common in Japan to have multiple bonds, similar to psychological attachments. In this study, questionnaires were administered to married subjects of 900 with children. The main findings were: (1) Being aware of psychological benefit of Japanese bonds actually increased the level of marriage satisfaction. (2) Husbands were more satisfied with their marriage than wives. (3) Marriage satisfaction positively correlated with the parent-child satisfaction. (4) Mothers were more satisfied with their parent-child relationships than their marital relationships. More in details were discussed in the article.

目　的

夫婦における関係性とは家族や親子のそれとは異なり、夫婦としての価値観を新たに形成しなければならず、その関係が永遠に継続するかは当人次第である（平木・中釜，2006）。Sager（1977）によると、夫婦間にはお互いへの期待や欲求が想像されている以上に存在し、それらは３つのレベルに分類されるようだ。１つ目は言葉によって交わされた意識的な契約であり、２つ目は意識化されてはいるが言葉を交わすのはためらわれる契約であり、３つ目は当人も気付いていないような願望に近い無意識レベルでの契約である。３つ目の契約において、言葉とは裏腹の期待を暗黙のうちに抱いている場合、満たされない思いが募り、関係に不満がたまるといった誤解に近い結果を生むことになるといえる。どのレベルであれ、相手への、あるいは関係性に対する不満が解消せずに持続することになれば、夫婦関係の解消につながる可能性が

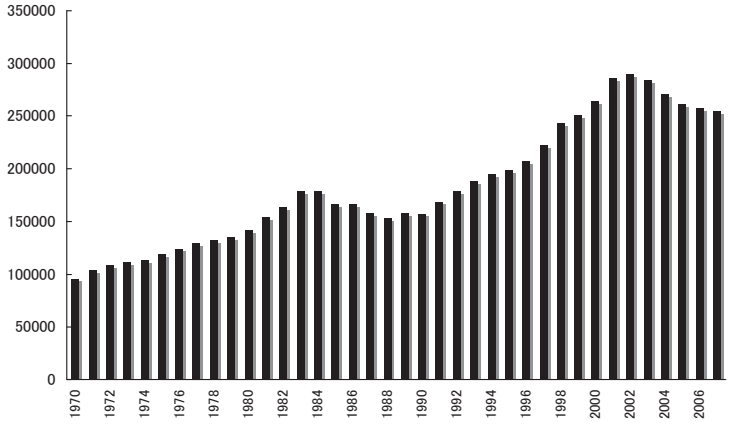

Figure 1　離婚件数の推移

高まると考えられる。日本でも近年は3組に1組が離婚する時代といわれ、平成14年度まで右肩上がりで推移した離婚件数はその年で約29万組に達し、それ以降も毎年25万組以上が離婚を選択している（厚生労働省，2007）（Figure 1参照）。

本研究では上述した夫婦間の契約概念に近い「夫婦間の絆」を取り上げる。夫婦間の絆は、友人間のように、その維持も解消も個々人の自由に委ねられており、また親兄弟との絆のように存在自体が当たり前のものとは異なり、特権的な意味がこめられているようだ（戸口，2001）。離婚件数から察するに関係の解消自体が比較的自由になってきているとしても、その自由さは友人間ほどではないだろう。もとは他人であることから親子間のように当たり前ともいい難く、しかし、夫婦間に絆が存在することは否定し難い事実である。夫婦間の研究においては、人口動態的なアプローチ（年齢、学歴、収入などの変数を主にする）、社会的交換理論のアプローチ（婚姻のプラス面、解消への障害、代替他者の獲得可能性を対象とする）、行動観察的アプローチ（コミュニケーション内容から相互作用を理解する）、認知理論的アプローチ（信念や帰属意識に着目する）など多岐にわたるが（数井，1998）、本研究では、夫婦間の絆、夫婦間の関係満足度、親子間の関係満足度といった心理的要因を用い、それぞれの関連性を検討することで現代の夫婦関係を紐解くことを目的とする。

方　法

調査協力者

調査会社のモニター登録者からランダムサンプリングした全国の子どもを持つ900名の親（息子が第1子の父母各225名、娘が第1子の父母各225名）を対象にWeb調査を依頼した。親の平均年齢は42.82歳（$SD=9.96$）、レンジは21–59歳（男性42.91歳（$SD=9.89$）、レン

ジ 23–59 歳；女性 42.73 歳（*SD*＝10.04）、レンジ 21–59 歳）、子の平均年齢は 13.97 歳（*SD*＝9.23）、レンジは 0–40 歳（息子 14.42 歳（*SD*＝9.36）、レンジ 0–37 歳；娘 13.51 歳（*SD*＝9.07）レンジ 0–40 歳）となった。

さらに、子の平均人数は 1.84 人（*SD*＝.76）であり、協力者の平均婚姻暦は 188.52 ヶ月（約 16 年）、レンジは 1–473 ヶ月（約 39 年）（男性 133.31 ヶ月（約 15 年）、レンジ 4–430 ヶ月（約 36 年）；女性 199.74 ヶ月（約 17 年）、レンジ 1–473 ヶ月（約 39 年））となった。また、協力者の属性については、男性の 74%（335 名）が給与所得者、次いで自営業 12%（54 名）となり、女性の 62%（279 名）は専業主婦、次いでパート 22%（101 名）となった。最終学歴については、男性の 58%（260 名）が大卒、次いで高卒 25%（112 名）となり、女性の 29%（129 名）が短大卒、28%（124 名）が大卒、27%（121 名）が高卒となった。世帯年収においては、300 万未満：男性 6%（26 名）、女性 7%（32 名）；300 ～ 700 万未満：男性 50%（226 名）、女性 47%（211 名）、700 ～ 1000 万未満：男性 24%（107 名）、女性 29%（129 名）；1000 万以上：男性 20%（91 名）、女性 17%（78 名）という分布になった。

測定尺度

①絆尺度：親からみた子どもとの絆に対する認知を測定すべく、髙木・戸口（2006）で作成された 48 項目からなる尺度を使用（絆の対象は第 1 子）。それぞれの項目内容が自分の考えにどの程度該当するかを、「とてもそうである (6)」から「全くそうでない (1)」までの 6 件法で回答を求めた。

②夫婦関係満足度尺度：夫婦関係に対する親の満足度を測るべく、5 項目（私は○○との関係に満足している、○○は私のことを思ってくれる、○○は私を理解してくれる、○○との関係は大切である、私と○○はうまくいっている）が自分たちの関係にどの程度該当するかを「とてもそうである (6)」から「全くそうでない (1)」までの 6 件法で回答を求めた。

③親子関係満足度尺度：親子間の関係に対する親の満足度を測るべく、5 項目（私は○○との関係に満足している、○○は私のことを思ってくれる、○○は私を理解してくれる、○○との関係は大切である、私と○○はうまくいっている）が自分たちの関係にどの程度該当するかを「とてもそうである (6)」から「全くそうでない (1)」までの 6 件法で回答を求めた。

結　果

尺度の構造解明

①絆尺度の評定データに基づき因子分析（主因子法、Promax 回転）を行った結果、4 因子構造が抽出された（Table 1 参照）。絆で結ばれると安心であり、絆は心の支えであるといった絆が存在することによる心理・情緒的なメリットを示す 16 項目からなる絆の「心理的効用」

Table 1　絆尺度の因子分析結果

質問項目		因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
21）夫（妻）との絆は、心の支えになっている		.88	−.06	.01	.08
23）夫（妻）と絆で結ばれているので、一体感を感じる		.85	.13	−.06	−.06
39）夫（妻）との間に絆があるので、嬉しい		.84	−.01	.01	−.04
40）夫（妻）と絆で結ばれているので、幸せである		.83	−.05	.04	−.09
6）夫（妻）との絆は、失いたくない		.82	−.10	−.02	.06
10）私には、夫（妻）との絆が必要であると思う		.81	−.09	−.05	.15
15）絆で結ばれている夫（妻）のためなら、自己犠牲もいとわない		.79	.07	−.04	.02
13）夫（妻）と絆で結ばれているので、心が通じ合っている		.78	.10	−.02	−.20
22）夫（妻）と絆で結ばれていると、困難も乗り越えられると思う		.78	−.10	.01	.17
17）夫（妻）との絆は、強いものである		.78	.02	.04	−.13
1）夫（妻）とは絆で結ばれているので、安心である		.74	.03	−.01	−.24
3）夫（妻）との絆は、夫（妻）とのつながりそれ自身であると思う		.68	.03	−.04	.06
29）夫（妻）との絆は、夫（妻）との結びつきそのものであると思う		.63	.09	.02	.18
14）夫（妻）との絆は、切りたくても切れないものであると思う		.58	.21	.10	−.06
8）夫（妻）と離れて住んでいても、絆は切れないと思う		.40	.10	.14	−.13
32）夫（妻）との絆は、自分次第でいくらでも変わると思う		.39	.02	.14	.18
30）夫（妻）との絆に、やさしさはとくに必要でないと思う		.01	.75	.03	−.11
43）夫（妻）との絆は強すぎて、厄介である		.02	.68	−.04	.12
19）夫（妻）との絆など、単なる思い込みでしかないと思う		−.24	.63	.08	.07
18）夫（妻）との絆は、とくに大切なものではないと思う		−.24	.60	.06	.04
41）兄弟姉妹間には、絆ができないと思う（いない場合はイメージで）		.20	.59	−.17	.04
26）絆で結ばれている夫（妻）に、無償の愛は必要でないと思う		−.02	.58	.04	.02
16）絆とは、血縁関係のことであると思う		.21	.52	−.07	.06
44）夫（妻）との絆には、友情的なものは必要ないと思う		.15	.50	.06	.06
46）夫（妻）との絆は、いつの間にか自然にできるものであると思う		.02	.11	.70	−.06
48）夫（妻）との絆は、意図的に作ろうとするものではないと思う		−.01	−.05	.68	−.03
47）夫（妻）との絆は、目には見えないものであると思う		.20	−.18	.58	.13
9）夫（妻）との絆は、時に、不安定なものになることがある		.08	.16	−.03	.67
11）一度壊れた夫（妻）との絆は、修復しにくいと思う		−.03	.04	.03	.45
因子間相関	因子 2		−.32		
	因子 3		.30	.01	
	因子 4		−.33	.01	.03
固有値		9.67	2.78	1.28	.80
寄与率		33.34	9.60	4.43	2.74
累積寄与率		33.34	42.94	47.36	50.11

因子（$\alpha = .95$）、絆にはやさしさや愛情が必要であり、厄介であるといった絆で結ばれるための条件を示す8項目からなる絆の「必要条件」因子（$\alpha = .81$）、絆は目に見えない、自然にできるといった抽象的側面を示す4項目からなる「自然発生性」因子（$\alpha = .74$）、絆を持つことは不安定で修復が困難であるなどの不安定な側面を示す2項目からなる「不安定性」因子（α

＝.47）が確認された。

②夫婦関係満足度（α＝.95）と③親子関係満足度（α＝.93）については単一構造とみなし、信頼性を検討した結果、双方において十分な値が確認された。

夫婦間の性差の検討

まず、性別による下位尺度ごとの違いを検討すべく、1要因の分散分析を行った結果、心理的効用（$F(1,899)=13.35^{**}$）、不安定性（$F(1,899)=5.95^{*}$）、夫婦関係満足度（$F(1,899)=5.25^{*}$）、親子関係満足度（$F(1,899)=7.14^{**}$）において有意差が確認された。これらから、夫が認知する妻との絆（$M=4.32$）の方が、妻が認知する夫との絆（$M=4.11$）よりも心理的な効用が高く、逆に、妻が認知する夫との絆（$M=4.13$）の方が、夫が認知する妻との絆（$M=4.00$）よりも不安定であるとの評価がなされたといえる（Figure 2参照）。また、夫（$M=4.47$）の方が妻（$M=4.31$）よりも夫婦関係に満足しており、他方、妻（$M=4.75$）の方が夫（$M=4.60$）よりも（長子との）親子関係に満足をしていた（Figure 3参照）。夫は、妻よりも夫婦間の絆における正の部分をより認識し、夫婦関係にもより満足をしている姿が浮かび上がったといえよう。

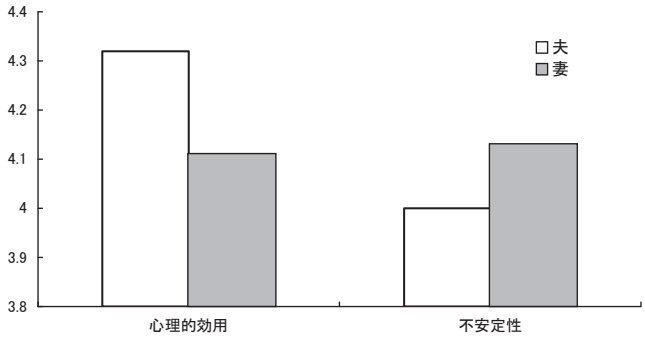

Figure 2　平均値のグラフ

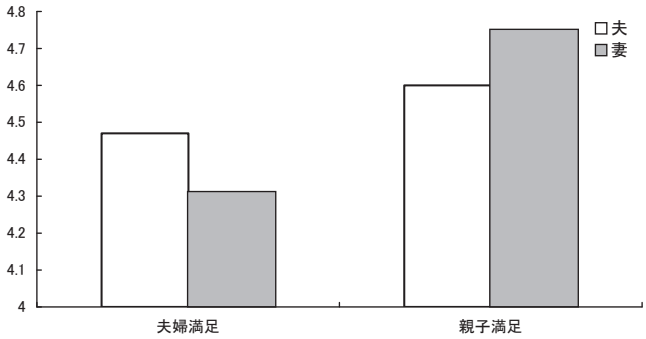

Figure 3　平均値のグラフ

夫婦の絆と夫婦関係満足度、親子関係満足度との関連性

夫婦間の絆認知が夫婦間の関係満足度および親子関係満足度に関連があるとの考えのもと、絆の下位尺度とそれぞれの満足度との相関分析を行った。その結果、全ての2変数間において有意な相関関係が確認された（Table 2参照）。

Table 2　下位尺度間の相関係数

	夫婦関係	親子関係
心理的効用	.86**	.39**
必要条件	−.35**	−.22**
自然発生性	.31**	.20**
不安定性	−.51**	−.13**

特に夫婦間の絆において、絆のプラス面を認識しているほど関係満足度が上昇する傾向が示され、これは過去の知見と同様の傾向といえる。また、夫婦間の絆が不安定であったり、こうしなければならないといった条件があると、夫婦間の関係満足度は低下することが伺えた。さらに、絆対象（本研究では夫婦）との「絆の有り様」が子どもとの関係満足度にも影響を与えている結果は興味深い。夫婦間の絆に心理的な効用を認知していれば、間接的ではあるが、自ずと子どもとの関係性にもプラスの影響を及ぼすのである。また、追加の分析によって、関係満足度間にも有意な正の相関関係（$r = .40^{**}$）が認められ、夫婦関係に満足をしていれば、親子関係にも同様に満足をする傾向が示された。夫婦の性差による影響が前述の分析結果にも現れていることから、性別ごとの分析を行い、その結果をTable 3に記す。

Table 3　下位尺度間の相関係数（性別ごと）

	夫婦関係		親子関係	
	夫	妻	夫	妻
心理的効用	.87**	.85**	.44**	.36**
必要条件	−.30**	−.41**	−.16**	−.29**
自然発生性	.31**	.31**	.21**	.19**
不安定性	−.46**	−.55**	−.18**	−.10*

夫婦関係満足度との関連では、相対的ではあるが、妻の方が夫よりも絆の必要条件・不安定性においてより負の相関を示しており、絆におけるマイナス面が（夫のそれ）よりも影響力を持つことが示唆される。親子関係満足度においては、必要条件において妻の方がより負の影響を、不安定性においては夫の方がより負の影響を受けている（しかし統計的な影響力の差は言及しない）。また、関係満足度間の相関分析において夫（$r = .49^{**}$）の方が妻（$r = .34^{**}$）よりも強い相関関係を示しており、親子関係の出来が夫婦関係の出来により依存するのは夫側と

いえよう。これは、父子関係が妻を介して成立、あるいは夫婦関係が子どもを中心に成り立っている可能性を示唆するのかも知れない。さらに、前述の分散分析の結果と照らし合わすと、夫婦関係に夫よりも妻の方が不満足であったのは、夫婦間の絆における義務感（必要条件因子）や不安定感（不安定因子）といった負の側面をより認識しているからとも解釈でき、また親子関係においては（夫婦関係をより評価している）夫よりも妻の方が関係に満足をしていることから、母子関係の出来は夫婦関係からは（比較的）独立した形にあると考えることができる。このことを検証すべく、親子関係満足度を従属変数とし、夫婦（夫と妻）× 夫婦関係満足度（高低群）の２要因の分散分析を行った結果、交互作用が確認された（$F(1,896)=5.57^{*}$）。単純主効果検定の結果、夫における満足度の高低群間、妻における満足度の高低群間、そして満足度低群における夫婦間において有意差が認められた。満足度低群・妻（$M=4.41$）は満足度低群・夫（$M=4.10$）よりも明確に親子間満足度が高く、たとえ夫婦間の満足度が低くても、母子間の関係性満足度には影響を与えないことが明示されたといえる。

夫婦間と子どもの性別組み合わせによる検討

分析結果から、母子間の関係満足度が父子間の関係満足度よりも高いことが認められたが、この結果はあくまでも子どもの性別を度外視した結果である。母子間において、母 × 息子間と母×娘間の満足度を同じものとして捉えることは無理があるのかも知れない（父子間も同様）。量的にも質的にも、親子間の性別組み合わせにより関係満足度が異なる可能性を念頭に、さらなる検討を試みた。親子関係満足度を従属変数に、両親（父と母）× 子ども（息子と娘）の２要因の分散分析をおこなった結果、両親の主効果のみが確認された（$F(1,899)=7.15^{**}$）。この結果から、母親（$M=4.75$）の方が父親（$M=4.59$）よりも親子間満足度が高いとの結果が再度確認された。交互作用が存在しなかったことから、残念ながら本研究では親子間の性別組み合わせが親子間の関係満足度に影響を与えていないことが示された。母親は、子どもが息子であろうと娘であろうと長子との関係に満足しており、それは父親とのそれよりも有意に高く、従来の考えを踏襲する結果となった。

考　察

本研究の結果、夫婦ともに「絆の心理的効用」が感じられると夫婦関係満足度が上昇するが、夫の方が「夫婦間の絆」をより肯定的に感じ、夫婦関係にも満足をしていることが確認された。つまり「夫婦間の絆」からポジティブな側面を感じられれば夫婦関係は案外うまくいき、またそのような傾向は夫の方が高いのである。

また、親子関係満足度は、夫婦関係満足度と関連しており、その傾向は夫の方が強い。解釈すると、夫にとって父子関係とは夫婦関係を媒介して成り立っており、妻との関係悪化がその

まま親子関係の悪化につながるのである。「子はかすがい」とは、夫により当てはまる諺といえよう。母子関係については比較的独立しており、あまり夫婦関係からの影響を受けないようである。

夫婦間の絆が存在することを前提として調査を行ったが、いずれにしても、調査協力者には絆に対する肯定的あるいは否定的な態度がすでに形成されていたことで、逆説的ではあるが、夫婦間の絆は確かに存在することが証明されたといえる。もちろん「絆という現象」を日頃あまり意識することはないのかも知れない。しかし、「絆」という用語に付随している潜在的な文化的価値観について今回あらためて想起してもらった結果、共通の態度が備わっていたことが判明したのである。また、夫婦間で絆に対する肯定的な態度が形成されていれば、該当する関係性にも満足をするのである。離婚という社会的関係の解消が増加している現状で、もちろん不況を原因とする経済的要因を見逃すことはできないが、夫婦間契約によって相手に対する欲求が満たされること、つまり、絆を意識化する努力が、困難を乗り越えるための秘訣なのではないだろうか。例えば、過去に共有した出来事についての会話、アルバムの整理、将来に向けて夫婦で共有するであろう出来事のプランニングなどによって絆の意識化が可能なのではないだろうか。夫婦間にすでに存在している絆にあらためて気付くことが、単なる関係の継続だけではなく、関係の深耕にも役立つことだろう。

引用文献

平木典子・中釜洋子（2006）．家族の心理－家族への理解を深めるために－、サイエンス社.
数井みゆき（1998）．第２章　結婚・夫婦関係の心理学、柏木惠子（編）結婚・家族の心理学、ミネルヴァ書房.
厚生労働省（2007）．平成 16 年人口動態公的月報年計.
Sager, C. J.（1977）．Marriage Contracts and Couple Therapy, Jason Aronson.
戸口民也（2001）．夫婦の絆を生きて、カトリック生活、ドン・ボスコ社.